

## イタリアンライグラスの採種栽培法試験

田村紘吉・畠山澄雄・十川幸一  
(宮崎県総合農業試験場)

国内で育成され、農林登録された品種の種子が市販されるまでには6~7年の長年月を要して販売されている。その間には新に品種が育成され農林登録を受け、外国で種子増殖中の品種は過去の品種として取扱われているのが現状である。

このことから、農林登録された品種を早く普及させるため農家で自家採種のための栽培法について播種法と播種量、播種期と1番草刈取有無について検討したので報告する。

## 試験方法

(1) 播種法と播種量、供試品種は山口農試育成の山系12号を用いた。播種法は畦巾30cm区(畦30区)と同50cm区(畦50区)を、播種量は50, 70, 100, 200 g/aの4水準区を設け、50年10月24日に播種した。施肥量は基肥にN 0.3, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 1.5, K<sub>2</sub>O 1.0kg/a, 追肥にN 0.2kgを施した。

採種は穂首が50%黄化した5月12日に一斉刈取後ビニールシートで1日乾燥後脱穀、精選した。

(2) 播種期と1番草刈取有無、供試品種はミナミワセを用いた。播種期は51年9月24日(9月播)、10月12日(10月播)、11月2日(11月上播)、11月18日(11月中播)の4水準区を設け、11月中播を除いた区は、草丈60cmで1番草を刈取る区と無刈取区を設けた。播種法は種子量100 g/aを畦巾50cmに条播した。施肥量は無刈取区にN 0.5, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 1.5, K<sub>2</sub>O 1.0kg/a, 刈取区にN 1.0, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 1.5, K<sub>2</sub>O 1.0kg/aを全量基肥で施用した。採種期は9月、10月播の刈取、無刈取および11月上播の無刈取区は5月10日、11月上播の刈取区および11月中播は5月18日に一斉刈取で実施した。

## 結果および考察

## 1) 播種法と播種量

出穂期は3月12~14日、開花期は4月12~22日で開花最盛期が長く、開花最盛期からの日数による採種期の決定は困難であった。

茎数は畦30区が平均1,620本/m<sup>2</sup>、畦50区が1,680本、穂数は畦30区が平均1,340本/m<sup>2</sup>、畦50区が1,280本で、茎数に対する穂数割合は畦30区が71%で畦50区の61%より高かった。穂数割合の播種量による差は畦30区では増加によって高まったが、畦50区では判然としていた。穂

長、穂重は図1に示すように穂長は畦30区が、穂重は畦50区が優れ、処理間では両畦区とも播種量が少ない程1穂は大きく、畦30区ではその差が大であった。

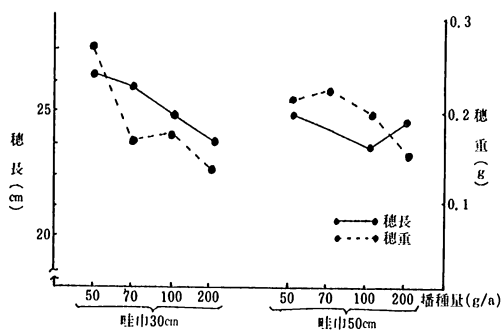


図1 播種量と1穂長、1穂重

採種量は図2に示すとおりで、畦30区が平均13kg/aで畦50区の11kgより多収を示した。処理間では畦30区の100 g区が15.7kg/aが最多収で、畦30区は全播種量区とも11kg/a以上の多収であった。畦50区では70 g, 100 g区が11kg以上を示したが、50 g区は9 kgのやや低収であった。

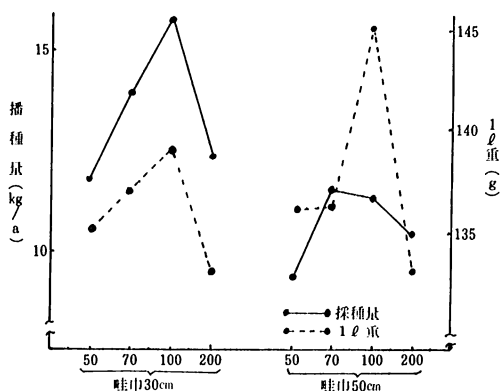


図2 播種量と採種量、1穂重

千粒重は畦30区が平均2.79 g、畦50区が2.74 gで、畦30区では70 g区>100 g区>50 g区>200 g区、畦50区では70 g区、100 g区>200 g区>50 g区の順であった。

1穂重は両畦区とも100 g区が最も重く、ついで70 g区の順で、品質的には畦巾の差より播種量による差が大

で、両畦区とも100gが優れていた。

2) 播種期と1番草刈有無

開花期は9月播, 10月播区は12月上旬に20~30%出穂したが, 冬季の寒さで枯死したため出穂が遅れ, 両区とも4月14日であった。11月上播区は4月18日, 11月中播区は4月22日であった。1番草刈取の開花期に及ぼす影響は11月上播で7日程遅れた以外は無刈取区と大差なかった。

1番草刈取は9月播区が11月24日で生草重320kg/a, 10月播区が1月11日で同320kg/a, 11月上播区が3月25日で同247kgであった。

穂数割合は11月上播区の90%が最高で, これより早播するほど低下する傾向が認められるが, 早播では一番草を刈取ることによって高まり, 9月播では約15%高まった。

1穂長は図3に示すように10月播区が長く, これより早, 晩播では短かった。また, 刈取の影響をみると9月播区では刈取区がやや長く, プラスの効果を示したが10月, 11月上播では短かく, マイナスの効果と認められた。

採種量は図4に示すように10月播の12kg/aが最多で

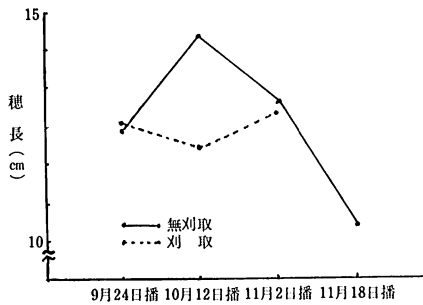


図3 播種期と穂長

ついて9月播の11kg, 11月上播の10kgの順で, 各播種期とも1番草を刈取ることによって減収し, その度合は晩播程大きく, 11月上播は43%の減収率であった。

千粒重, 1ℓ重は採種量と反対に晩播ほど重く, 品質的に優れていた。また, 各播種期とも刈取区が無刈取区より重く, 刈取によって品質が向上する傾向が認められた。

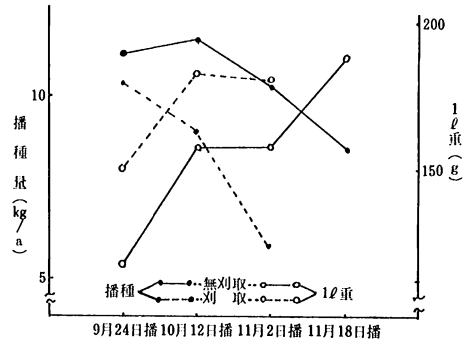


図4 播種期と採種量, 1ℓ重

まとめ

極早生イタリアンライグラスの採種栽培法は, 条播栽培法での畦中間隔は30cm巾が適するが, 農家での採種の場合農作業および労力の面から畦巾50cmが適した。

播種量は畦巾30cm, 50cmとも100g/aが適量で, これより多い場合採種量, 種子品質が低下した。また倒伏の危険性もあった。

播種適期は10月中旬~11月上旬で, 1番草を刈取利用の場合は9月中旬~10月上旬が適期であった。

なお1番草利用では少なくとも12月中旬までに刈取るのが望ましいと考えられた。

採種期については更に検討を要するが, 穂首が黄化し自然落下種子が一部認められた時期が適期と思われた。